

第二外科

開心術を受ける学童の 不安と軽減について

発表者 宮下 順子

第二外科看護婦一同

はじめに

私達は病身ということだけで様々な不安を持っていると思われる患者に接し、その不安を探求し、何らかの形で緩和あるいは軽減することが、間接的には疾病又は術後経過を良い方向にもっていくことができるのではないかと思いアンケートを作成しました。

しかし、アンケート回集の結果、このアンケートでは、作成上の誤ち、患者との距離の近さ等から、患者の内面的な不安まで探求できませんでした。

そこで今回は、手術に際し恐怖をさかんに表現している心臓疾患の一学童を一例に、その不安の緩和と軽減法を経過報告的に述べたいと思います。

患者紹介

10才男児

住所 伊那市

病名 心房中隔欠損症

入院経験なし

現病歴 妊娠分娩経過は正常であった。

幼児期より感冒に罹患し易かった以外は特に既往はなかった。5才の保育園の検診で心雑音を指摘され当院小児科にて心房中隔欠損症と診断されたが、症状なきを放置していた。本年8月東京国立小児センターを受診し、手術を勧められ9月18日当科入院となる。症状は特になく、運動制限はされていませんでした。

家族構成 祖父母、両親の5人暮らし 皆健在

家業 商業（食品店経営）

性格 素直で明朗であるがやゝ神経質方面を持っている。

問題点

- I 環境の変化に対する不安がある。
- II 検査に対する不安がある。
- III 手術に対する不安がある。

問題点Ⅰに対する目標

環境に1日も早く順応できる様援助する。

方法：同室者、遊び学習友達を紹介、職員の紹介及び役目の説明を行う。患者の家族の背影を知り家族へのオリエンテーションを行い、日常習慣を知る。

例えば、学習の進度、日常の学習習慣

小遣いの使い方

食餌の嗜好

排泄習慣、夜尿症の有無

睡眠時間

癖、外泊の有無

これらに対し、学習に関しては、学校からの問題集を朝行なわせる。

小遣いは、家族より小遣いとして看護婦に渡してもらい1日50円以内とし用途によって渡す。その他の事は特に注意点はなし。尚一人での外泊はしたことはありませんでした。

次に、設備構造へのオリエンテーションを行ない、演習させる。

例えば、床頭台、ロッカー、食器棚は家族と共にオリエンテーションをし整理させ点検する。ナースコール、枕燈、トイレ、洗面所の使用法等は演習させる。浴室、冷蔵庫、テレビ室、遊び場所はその都度指導する。看護室へは許可なく入らない様にする。

問題点Ⅱに対し、

目標：検査の必要性を理解させ方法を話す。

方法：胸部レントゲン3方向撮影を行なう際、服用するバリウムに対しては果物の様な臭いがして甘い味が味わわずに一気に飲む方法を話す。

採血には、血液の性質について話し興味を持たせ、凝固出血時間測定には、ストポッチを持たせ協力させる。

心臓カテーテル法には、診断の目的である事、異った環境で行なう小手術である事、苦痛に関してはその程度を話してやる。又、立ち回りスタッフに関してのオリエンテーションも行なう。

問題点Ⅲ、手術に対する不安から次の様な問題点が生じた、

1. 死ぬのではないかと口にする。
2. 痛いのではないかと気にしている。
3. 下痢をし、排尿困難が生じた。
4. 食欲不振が生じた。

目標：手術の必要性を理解させ納得させる。

体力をコントロールし、精神的緊張をやわらげる様に努める。

方法：経過効率を話し、術后患者と会話させる。疼痛に対しては麻酔の特徴を話し緊張をほぐす。

数回の下痢が生じたが、その原因が冷たい牛乳を2本一度に飲んだ事であったので、温めて一本づつのませることにより牛乳による下痢への不安は消失した。又、夜間尿意があっても排尿出来ない事を訴えて来た。精神的排尿困難と予測し、よく話しを聞き、腹部の観察を行ない、湯タンボの使用等による緊張緩和に努めた。又、術後に備えて、ベット上にて排尿訓練もさせた。

食欲不振に対しては、その原因が次の様なものにある事が分った。

1. 奇数である自分の体重と麻酔前投薬量との関係を気にしていた。
2. air way の挿入に対する羞恥心があった。(自分ではおしゃぶりと云っていた)
3. 分泌物による気道閉鎖を心配していた。

これらに対し、体重は偶数、奇数に関係なく厳密に計算される事、以前に手術した患者さんにも奇数体重の人達が多数居た事を話した。air way挿入は必要性を話し、気道閉鎖には、注射、吸引、吸入等による援助ができる事を話し、痰絡方法を練習させる。と同時に栄養の必要性を話し、同室者の協力を得た。

まとめ

この様に小児には小児なりの不安がある。その解決方法には、看護婦が患者の固々の変化を観察し、各段階での問題点をとらえ、予測される事態を話し、看護相談的の技法を活用した事によって私達が話してやった事が現実にもそうであったと云うことが患児よりの信頼を得る結果となった。

手術当日の朝、看護婦さんによく説明を聞いているから心配はいらないが、おばあちゃんが心配しているから大丈夫だと云ってくれと云った程の成長を見せてくれた。

これは不安の軽減に於いての良し一例である。私達の日常、患者との会話一つにしてみても不安解消への糸口である事を再認識した。